保育者養成校における学生のピアノ技能に関する現状と考察
― 学生のグレード取得状況と意識調査の結果をもとに ―

The present conditions and consideration about the piano skill of students in childcare training school
― Based on the status of student acquisition of grades and the results of the awareness survey ―

井　上　朋　子*

（令和４年７月25日受理）

要約

本稿は、現在、本学で実施しているピアノグレード制の現状と課題を明らかにするものである。まず、2021（令和３）年度入学生対象のピアノに関する調査より学生のピアノ環境やピアノのレベルを整理した。次いで、「器楽Ａ」の半期間（４月～７月）におけるグレード取得状況を考察するとともに、Ⅰ期開始時と修了時に実施した学生の意識調査（自信度）を比較した。その結果、グレード制により一定の成果が現れていることと、ピアノの学習歴によって自信度の伸びに違いが見られることが明らかとなった。

キーワード：保育者養成校、ピアノ教育、グレード制
keywords：Childcare training school, Piano education, Grade system

１．はじめに

保育者を目指すにあたり、ピアノに対して不安をもっている高校生は少なくない。「ピアノ初心者でも授業についていけるか」「保育者になるためにはどの程度弾けたらよいのか」等という質問を多く受ける。保育現場において、ピアノを用いなくても様々に活動を展開することができるが、もちろんピアノを用いることで活動の幅が広がり、何より保育者自身の保育に対する自信にもつながる。また、保育者のより豊かな音楽表現は、子どもたちの感性や表現力にも影響を与える。よって、保育者にとって、ピアノの基礎的技能や表現力は重要である。

本学ではこれまで、「器楽Ａ」「器楽Ｂ」「音楽教育Ｃ」「音楽教育Ｄ」の中で、ピアノ個人レッスンの指導を行ってきた。このうち、「器楽Ａ」「器楽Ｂ」は、ピアノと弾き歌いの基礎的技能の修得を中心とした内容になっており、2014（平成26）年度よりピアノグレード制を導入することによって、個々の学生がレベルに応じた目標をもって取り組めるようになった[i]。また「音楽教育Ｃ」「音楽教育Ｄ」のピアノの個人レッスンでは、実習や就職試験など、個々の目的に応じながらもより実践的な技能を修得できる授業内容になっている。２年課程の学生は４期にわたって、また３年課程の学生は４期の授業に加えて正課外における２期間の「ピアノ特別レッスン」を実施し、２年課程及び３年課程ともに、在学中の全学期、ピアノの個人レッスンが受けられるよう、ピアノ教育を充実させてきた。今年でグレード制を開始してから９年目になるが、今一度現在のピアノグレード制の現状を確認し、今後の課題を明らかにしておきたい。

本稿では、調査対象を２年課程の「器楽Ａ」に限定し、対象者の入学時におけるピアノ環境とピアノのレベルを整理する。次いで、「器楽Ａ」の半期間（４月～７月）でのグレード取得状況を整理・考察するとともに、Ⅰ期開始時と修了時に実施し

（＊いのうえともこ　保育科教授　音楽教育・ピアノ）

表１　２年課程の音楽関係科目

１年Ⅰ期	１年Ⅱ期	２年Ⅰ期	２年Ⅱ期
器楽Ａ※	器楽Ｂ※	―	―
音楽教育Ａ	音楽教育Ｂ	音楽教育Ｃ※	音楽教育Ｄ※

表２　３年課程の音楽関係科目

１年Ⅰ期	１年Ⅱ期	２年Ⅰ期	２年Ⅱ期	３年Ⅰ期	３年Ⅱ期
（正課外） ピアノ特別レッスン※	器楽Ａ※	器楽Ｂ※	（正課外） ピアノ特別レッスン※	―	―
音楽教育Ａ	―	―	音楽教育Ｂ	音楽教育Ｃ※	音楽教育Ｄ※

※ピアノ個人レッスンを含む授業
（補足）幼稚園教諭二種免許必修科目：器楽Ａ／器楽Ｂ／音楽教育Ａ／音楽教育Ｂ
保育士資格必修科目：器楽Ａ／音楽教育Ａ
保育士資格選択必修科目：器楽Ｂ／音楽教育Ｂ／音楽教育Ｃ／音楽教育Ｄ

た学生の意識調査（自信度）を比較し、本学のピアノ教育の現状と課題を明らかにすることとする。

２．入学時の学生のピアノ環境と習熟度について

⑴　アンケート内容について

ここではまず、入学時に実施したピアノに関するアンケート調査の中から、学生の自宅のピアノ環境と入学時の習熟度に関する回答について考察する。2021（令和３）年度Ⅰ期は、コロナ感染拡大予防のため、本学の授業は対面授業とオンライン授業の両形式で開講された。２年課程の１年生は、対面授業（週２日）とオンライン授業（週３日）で実施され、「器楽Ａ」はオンライン授業日の開講となったため、希望者のみ対面でのピアノ指導を実施することになった。

調査対象：Ｈ短期大学部２年課程入学者66名
調査時期：2021年４月７日
調査内容：「質問紙調査」
①自宅のピアノ環境を教えてください。
②今のピアノのレベルを教えてください。自分のレベルに近いものに○を付けて下さい。
（「ソナチネ・アルバム」以上／「バイエル」終盤程度／「バイエル」中盤程度／ピアノ経験はあるが、ほとんど初心者のレベル／全くピアノを弾いたことがない／分からない）

⑵　結果

【自宅におけるピアノ環境】

自宅のピアノ環境については、図１のように87％の学生が、ピアノ、電子ピアノやキーボード等の鍵盤楽器を所有していることが分かった。想像していたよりも、自宅で練習できる環境が整っていることが分かった。これは、入学予定者には入学前課題として、ピアノグレード一覧表（表３～５）を配布し、練習に取り組んでおくように促していることも影響していると思われる。大学内には個別ピアノ練習室とＭＬ教室があり、授業の空き時間や放課後に自由に利用できる環境を整えているが、通学日以外や実習中等にも練習を継続するには、自宅に鍵盤楽器があるに越したことはない。

【入学時のピアノの技能レベル】

回答は自己判断によるものであるが、図２が入学時のピアノのレベルに対する回答結果である。「バイエル」中盤以上のレベル（「ソナチネ・アルバム」以上・「バイエル」終盤程度・「バイエル」中盤程度）と回答した者が45％（30名）見られた。「分からない」の回答者10％（７名）のうち、「小学校６年間、ピアノを習っていたが、バイエルやソナチネを使用していなかったため分からない」（１名）、「以前、ショパンやラフマニノフを弾いていた」（１名）と記しており、また「忘れました」

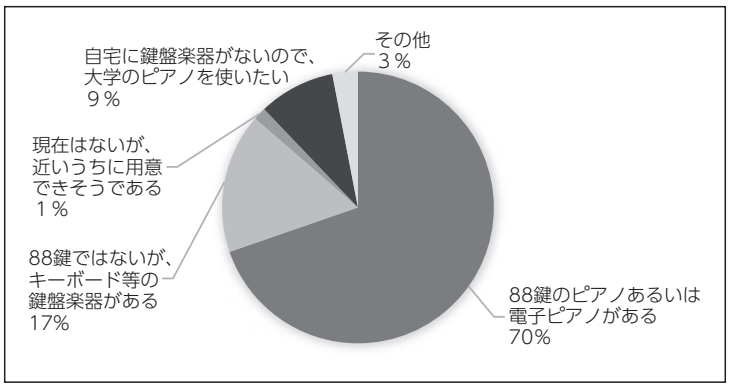

図１　自宅におけるピアノ環境

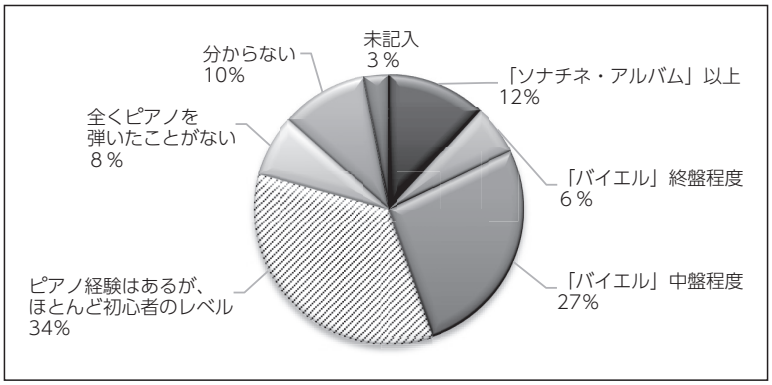

図２　入学時のピアノのレベル

（３名）は未経験者・初心者ではないと自覚していると捉えると、全体の半数以上が、「バイエル」中盤以上のレベルをもって入学してきていることが分かる。

これは、近年高等学校においても保育系の進学希望者対象の選択授業科目として、ピアノの内容を取り入れている学校が増えてきていること、オープンキャンパスや入学前教育の課題においてもピアノの練習を促してきたこと、また2019（令和元）年度より入試区分に「ピアノ型実技入試」を導入したことも影響し、全体的に入学者のピアノ学習に対する意識は高まってきていると捉えることができる。

一方で、「全くピアノを弾いたことがない」が８％、「ピアノ経験はあるが、ほとんど初心者のレベル」が34％であり、未経験あるいは初心者と自覚している入学者も４割以上見られることが読み取れる。

３．2021年度Ⅰ期のピアノ取得グレード状況と意識調査結果

⑴　本学のピアノグレード制について

現在、本学では、ピアノレベル別の３つのコース（表３～５）を設定し、学生個々のレベルに応じたピアノ学修を進められるようにしている。2019（令和元）年度までは、授業外時間にグレード試験日を設定し、グレードの合否を判定していたが、コロナ感染拡大以降、グレード試験日は設けずに、このグレード表に基づいて個人レッスンを進め、レッスン内で各担当者が各曲の合否を判定している。器楽Ａの単位認定条件は、Ｓコースは Ⓢ１、Ａコースは Ⓐ１、Ｂコースでは Ⓑ２を合

表３　ピアノグレード【S（スーパー）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い・律動
Ⓢ１ ＊器楽 A クリアー必須	「バイエル」No.60～No.79 試験当日４曲指定	（律動） 器楽Ｂ修了時までに、 「歩く」 「スキップ」 「走る」 の律動の３通りを習得すること。
Ⓢ２	「バイエル」No.80～No. 98 試験当日４曲指定	
Ⓢ３	①「バイエル」No.99～No.105 試験当日４曲指定 ② 初見視唱１曲（子どもの歌の歌のみ）	
Ⓢ４ ＊器楽 B クリアー必須	①「ソナチネアルバム１」より任意の２つの楽章 ＊２つの楽章は同一曲とする ② 初見演奏１曲（子どもの歌の伴奏のみ）	
Ⓢ５	①「ソナチネアルバム１」より任意の２つの楽章 ＊２つの楽章は同一曲とする ② 初見弾き歌い１曲（子どもの歌の弾き歌い）	器楽Ｂ修了時までに必修曲２０曲すべてを合格すること。
Ⓢ６	① 自由曲 ② 初見視唱１曲（コールユープングン） と初見弾き歌い１曲（子どもの歌の弾き歌い）	
Ⓢ７	① 自由曲 ② 主要三和音の伴奏付け１曲 （ハ長調、ト長調、ヘ長調のいずれか）	必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓢ８	① 自由曲 ② 主要三和音の伴奏付けによる弾き歌い１曲 （ハ長調、ト長調、ヘ長調のいずれか）	
Ⓢ９	① 自由曲 ② 音名唱と階名唱１曲（子どもの歌より）	
Ⓢ10	① 自由曲 ② 移調奏１曲（ハ長調から長 ２度上へ） ＊子どもの歌より	
Ⓢ11	① 自由曲 ② 移調奏１曲（ニ長調から長 ２度下へ） ＊子どもの歌より	
Ⓢ12	① 自由曲 ② 移調奏１曲（ハ長調から同主調へ） と演奏曲に関する口述試験	

表４　ピアノグレード【A（アドバンス）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い・律動
Ⓐ1 ＊器楽 A クリアー必須	「バイエル」No.60～No.69 試験当日 ３曲指定	（律動） 器楽Ｂ修了時までに、 「歩く」 「スキップ」 「走る」 の律動の３通りを習得すること。
Ⓐ2	「バイエル」ト調長音階～「バイエル」No.79 試験当日 ３曲指定	
Ⓐ3	「バイエル」No.80～No.89 試験当日 ３曲指定と 「ブルグミュラー２５の練習曲」No.1	
Ⓐ4	「バイエル」No.90～No.98 試験当日 ３曲指定と 「ブルグミュラー２５の練習曲」No.3かNo.5	器楽Ｂ修了時までに必修曲２０曲すべて合格すること。
Ⓐ5 ＊器楽 B クリアー必須	「バイエル」No.99～No.105試験 当日 ３曲指定と 「ブルグミュラー２５の練習曲」No.4かNo.16	
Ⓐ6A （別ばして 6B 受験可）	「ソナチネアルバム１」4-1（No.4 の １楽章）・4-2・5-1・6-1・8-1・8-3・9-3・17-1 の中から任意の １曲	必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓐ6B	「ソナチネアルバム１」5-3（No.5 の ３楽章）・6-2・9-1・10-1・11-3・12-1・14-3・15-1・15-2・17-2　の中から任意の １曲	
Ⓐ7	自由曲	
Ⓐ8	自由曲	
Ⓐ9	自由曲	
Ⓐ10	自由曲	
Ⓐ11	自由曲	
Ⓐ12	自由曲	

表５　ピアノグレード【B（ベーシック）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い・律動
Ⓑ1	「バイエル」No.45～No.59 （No.53 と No.54 は除く）の中から任意の2 曲	（律動） 器楽Ｂ修了時までに、 「歩く」 「スキップ」 「走る」 の律動の３通りを習得すること。
Ⓑ2 ＊器楽 A クリアー必須	「バイエル」No.60・No.61・No.62・No.65・No.66・No.67　の中から任意の３曲	
Ⓑ3	「バイエル」No.72・No.73・No.75・No.76・No.77・No.78・No.79・No.83・No.84・No.85 の中から任意の3 曲	
Ⓑ4	「バイエル」No.88・No.89・No.90・No.91・No.93・No.94・No.95・No.96・No.97・No.98 の中から任意の2 曲と 「ブルグミュラー２５の練習曲」No.1かNo.3かNo.5	
Ⓑ5 受験必須グレード ＊器楽 B クリアー必須	「バイエル」No.80・No.81・No.82・No.99・No.100・No.102・No.104・No.105 の中から任意の２曲と 「ブルグミュラー２５の練習曲」No.4かNo.16	器楽Ｂ修了時までに必修曲 ２０曲すべて合格すること。
Ⓑ6A （別ばして 6B 受験可）	「ブルグミュラー２５の練習曲」No.2・No.6・No.7・No.8・No.10・No.11・No.17・No.18 の中から任意の １曲	必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓑ6B	「ブルグミュラー２５の練習曲」No.9・No.12・No.14・No.15・No.20・No.21・No.22・No.23・No.24・No.25　の中から任意の１曲	
Ⓑ7A （別ばして 7B 受験可）	「ソナチネアルバム１」4-1（No.4 の １楽章）・4-2・5-1・6-1・8-1・8-3・9-3・17-1 の中から任意の １曲	
Ⓑ7B	「ソナチネアルバム１」5-3（No.5 の ３楽章）・6-2・9-1・10-1・11-3・12-1・14-3・15-1・15-2・17-2　の中から任意の １曲	
Ⓑ8	自由曲	
Ⓑ9	自由曲	
Ⓑ10	自由曲	
Ⓑ11	自由曲	
Ⓑ12	自由曲	

格することと定めている。また、器楽Ｂでは、Ｓコースは Ⓢ４、ＡコースはⒶ５、ＢコースはⒷ５までを合格することに加え、弾き歌いの必修曲20曲と３通りの律動を合格していることが単位認定条件となっている。

⑵　分析方法について

本稿では、2021（令和３）年度入学生（２年課程）の１年Ⅰ期「器楽Ａ」におけるグレード取得状況と意識調査（自信度）を３つのコース別に考察することとする。分析方法としては、まず、各コースの選択者の入学時のピアノのレベルについて取り上げる。次いで、グレードの取得状況、弾き歌い曲、律動の合格状況、さらにⅠ期「器楽Ａ」開始時と修了時の意識調査（自信度）の結果を表に整理し、分析する。意識調査（自信度）については、「ピアノ」「弾き歌い」「律動」の３項目に対してそれぞれ10段階で自己評価してもらったものである。

尚、用いるデータは、Ⅰ期開始時と修了時の意

識調査を両方とも回答した44名の学生に限定している。

⑶　分析結果について

①Ｓコース

【Ｓコース選択者の入学時のピアノレベル】
ソナチネ以上：４名
バイエル中盤程度：１名
分からない（忘れた）：２名

Ｓコースを選択した学生は７名で、入学時のアンケートから得られたピアノレベルは、右のとおりである。

まず、Ｉ期の最初の取得グレードは、Ⓢ１あるいは Ⓢ２のいずれかであった。そして、Ｉ期修了時点で、最も多くグレードが進んだのは（ｂ）と（ｅ）の学生で、６段階進んでいた。一方、（ｃ）の学生のように、Ⓢ１で修了している学生もいた。全体のＩ期修了時の取得グレードは、Ⓢ１～Ⓢ８と幅が開いているが、グレード取得状況を平均すると、Ｓコース選択者は全体で３段階進んでいることが分かった。また、弾き歌いの平均合格曲数は20曲で、Ｓコースの弾き歌い用の楽譜[ii]は、本伴奏よりもさらに難易度の高いものを使用しているにもかかわらず、平均すると必修曲20曲分は修了していることが分かった。

次に、自信度についてであるが、Ｉ期修了時にピアノの自信度が入学時よりも上がったのは７人中２名のみで、３名は下降、残りの２名は変化なしであった。平均値をみても、0.28点下がっており、自信度が下がっていることが明らかである。弾き歌いに対する自信度の平均値は、0.43点上昇、律動に関しては、合格者が３名で、７名全体の自信度の平均値に変化は見られなかった。

ここからは、１年Ｉ期「器楽Ａ」修了時の学生の感想記述を一部取り上げながら、自信度の結果に対する理由を探りたい。

まず、ピアノに対する自信度が上がった学生（ｇ）は、Ｉ期の目標であったバイエルを修了できたこと、また高校時のピアノ授業では人前で弾くことに抵抗があったが、短大の授業では１対１で丁寧な指導が受けられ、さらにピアノの中間発表を経験して、少しずつ苦手意識がなくなり自信を

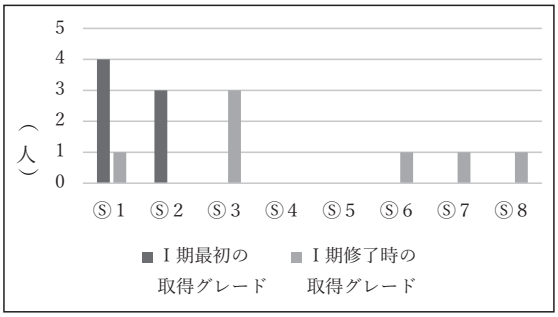

図３　Ｓコースのグレード取得状況

表６　コースの学生のグレード取得状況とＩ期開始時と修了時の意識調査結果

学生	最初の取得グレード	Ｉ期修了時の取得グレード	弾き歌い合格曲数	律動３種類	Ｉ期開始時 自信度（10段階評価）意識調査			Ｉ期修了時 自信度（10段階評価）意識調査		
					ピアノ	弾き歌い	律動	ピアノ	弾き歌い	律動
（ａ）	Ⓢ２	Ⓢ３	17	―	6	6	4	7	5	5
（ｂ）	Ⓢ２	Ⓢ８	26	―	9	9	9	8	6	9
（ｃ）	Ⓢ１	Ⓢ１	18	―	8	7	8	8	9	7
（ｄ）	Ⓢ１	Ⓢ３	16	―	8	8	8	7	6	6
（ｅ）	Ⓢ１	Ⓢ７	19	○	8	5	8	6	9	9
（ｆ）	Ⓢ２	Ⓢ６	16	○	8	5	8	8	6	8
（ｇ）	Ⓢ１	Ⓢ３	28	○	6	6	8	7	8	9
平均値	1.43	4.43	20	―	7.57	6.57	7.57	7.29	7.00	7.57

持てるようになったと振り返っている。

一方、6段階もグレードが進んだにも関わらず、ピアノに対する自信度が下がった（e）は、4月よりも自信がなくなった理由として、10年以上ぶりにピアノに触れたので指が動かなくなっていることにショックを受けたことと、曲に対する解釈を学ぶうちに技術面の粗が見え、過去に弾いていた時は表現でごまかしてきたことに気づいたことを挙げている。しかし、弾き歌いや律動に関しては自信が持てたと記し、特にできないと思っていた弾き歌いは、やってみるととても楽しく、子どもたちが周りにいることを想定しながら表現できたと述べ、自信度も4点上昇している。

その他、弾き歌いで2点自信度が下がった（d）は、弾き歌いでは楽譜ばかり見るのではなく、子どもたちがいると思って楽しそうに弾きたいと今後の課題を述べていた。

以上のように、自信度が上がった学生の感想からは、当然ながらピアノの授業を受ける中で、苦手意識を軽減させることができたこと、また楽しさを実感できたこと、自己目標が達成できたことなどが挙げられていた。一方、ピアノ学習歴は十分にあり、さらにグレードが進んだにもかかわらず自信度が下がっていた原因としては、短大でピアノ授業を受けていく中で、幼い頃に弾いていたときには考えなかった新たな課題が見つかったり、保育者として必要なスキルを自覚したりしたことが挙げられており、ピアノ演奏や弾き歌いに対するさらなる向上心が高まった結果であることが分かった。

②Aコース

【Aコース選択者の入学時のピアノレベル】
ソナチネ以上：2名
バイエル終盤程度：3名
バイエル中盤程度：6名
ピアノ経験はあるが
ほとんど初心者のレベル：1名
分からない（忘れた）：3名
無回答：1名

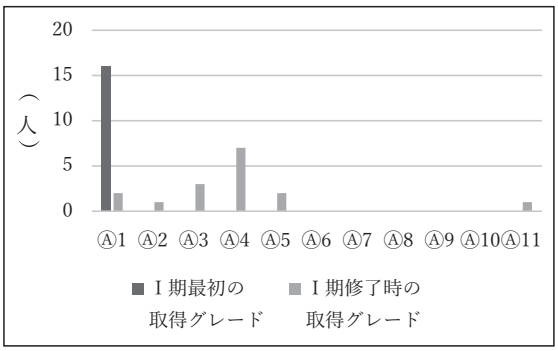

図4　Aコースのグレード取得状況

Aコースを選択した学生は16名で、入学時のアンケートから得られたピアノレベルは、上のとおりである。

まず、Ⅰ期の最初の取得グレードは、全員Ⓐ1であった。そして、Ⅰ期修了時のグレードは、最も多くグレードが進んだのは、学生（f）で11段階進んでいた。Ⓐ1で修了した学生は2名いたが、グレード取得状況を平均すると、Aコース選択者は全体で2～3段階進んでいることが分かった。また、弾き歌いの平均合格曲数は約17.6曲であった。

次に、自信度についてであるが、Ⅰ期修了時にピアノの自信度が入学時よりも上昇したのは16人中10名で、4名が下降、残りの2名は変化なしであった。全体の平均値をみても0.62点上がっている。弾き歌いに対する自信度の平均値は1.50点上昇、律動に関しては合格者が5名で、自信度の平均値は0.88点上昇していた。

ここからは、Ⅰ期修了時の学生の感想記述を取り上げながら、自信度の結果に対する理由を探る。

（g）や（l）は、成長を実感できたことが自信につながったようである。（g）は、ピアノと弾き歌いのいずれも自信度が2点上がっており、感想には「入学時は1曲弾くのに時間がかかっていたけれど、今は早く譜読みができるようになった。指番号に気を付けて弾けるようになってきた」と書かれている。また、（l）は、「弾き歌いの練習を始めてから自分で変わったと感じたことが一つあります。私は暗譜をしてからでないとスムーズ

表７　Ａコースの学生のグレード取得状況とⅠ期開始と修了時の意識調査結果

学生	最初の取得グレード	Ⅰ期修了時の取得グレード	弾き歌い合格曲数	律動３種類	Ⅰ期開始時 自信度（10段階評価）意識調査			Ⅰ期修了時 自信度（10段階評価）意識調査		
					ピアノ	弾き歌い	律動	ピアノ	弾き歌い	律動
（a）	Ⓐ1	Ⓐ3	15	―	5	5	4	7	8	6
（b）	Ⓐ1	Ⓐ4	16	―	8	7	7	7	7	7
（c）	Ⓐ1	Ⓐ4	13	―	6	3	3	5	3	3
（d）	Ⓐ1	Ⓐ1	2	―	5	4	2	4	3	2
（e）	Ⓐ1	Ⓐ1	4	―	4	4	5	4	4	5
（f）	Ⓐ1	Ⓐ11	21	○	5	4	5	6	5	6
（g）	Ⓐ1	Ⓐ4	19	○	4	3	5	6	5	4
（h）	Ⓐ1	Ⓐ4	38	○	6	7	6	7	8	9
（i）	Ⓐ1	Ⓐ4	20	―	5	1	3	7	5	5
（j）	Ⓐ1	Ⓐ2	22	―	7	4	6	8	8	6
（k）	Ⓐ1	Ⓐ5	27	○	5	4	4	6	6	5
（l）	Ⓐ1	Ⓐ3	18	―	3	3	2	5	6	4
（m）	Ⓐ1	Ⓐ4	15	―	5	4	4	5	4	4
（n）	Ⓐ1	Ⓐ5	23	○	5	4	4	6	6	7
（o）	Ⓐ1	Ⓐ3	20	―	7	6	6	8	8	7
（p）	Ⓐ1	Ⓐ4	9	―	7	3	3	6	4	3
平均値	1	3.88	17.63	―	5.44	4.13	4.31	6.06	5.63	5.19

に弾けなかったのですが、弾き歌いで歌詞や指番号を見ながら弾くようになってからは自然と楽譜を見ながら弾けるようになりました」と書かれ、自信度も３点上がっている。

そして、（ｊ）は目標を達成できたことが自信につながったようだ。感想には「目標にもしていたが、できなかった弾き歌いができるようになったことは、とても嬉しかった」と記述し、自信度は４点上がっている。また、（ａ）も弾き歌いの自信度が３点上がっているが、感想には「１週間でたくさんの曲を進めるのはとても大変でしたが、弾き歌いの方を全般に頑張ってこれてよかった」と記述しており、力を入れて練習したことが自信につながっていることも分かった。

また、（ｈ）は律動に関して、「思っていたより上手に弾けた」と述べ、６点から９点へと上がっている。恐らく、「器楽Ａ」の授業を受講するまでは、律動に合ったピアノ曲を演奏した経験がなく難しく捉えていたのであろう。しかし実際は、様々な子どもの歌の伴奏型を変奏するだけで「歩く」「走る」「スキップ」等の音楽に変化できることを知り、自信が持てたと思われる。

一方、自信度が上がらなかった（ｂ）や（ｄ）の感想には、「小学生の時に６年間ピアノを習っていてある程度弾けていたので困ることはなかったが、バイエル終盤になるほどだんだん難しくなり練習量を増やさなければ一回で合格する回数が減ってきてしまった」「音楽が苦手だからとかなり逃げてばかりで、練習からも逃げてしまった。自分の練習不足だと分かる授業だった」と自分の練習不足を反省する記述が見られた。また、（ｍ）は、中間発表で他の学生の発表を聴いて、自分の

実力のなさを実感したことを述べていた。

Ａコースを選択した学生は、「ピアノ」「弾き歌い」「律動」ともに、自信度の平均値は上がり、成長を実感できたことや目標を達成できたこと、また十分な練習量などが自信につながっていることが分かった。一方、自信度が上がらなかった要因としては、練習不足や他者のレベルとの差などがあった。

③Ｂコース

【Ｂコース選択者の入学時のピアノレベル】
バイエル中盤程度：６名
ピアノ経験はあるが
ほとんど初心者のレベル：19名
分からない（忘れた）：２名
無回答：１名

Ｂコースを選択した学生は28名で、入学時のアンケートから得られたピアノレベルは、上のとおりである。大半が、「ピアノ経験はあるがほとんど初心者のレベル」である。

まず、Ｉ期最初の取得グレードは、Ⓐ１の１名を除いて、Ⓑ１あるいは Ⓑ２である。Ⓐ１から始めた（ｂ）は、Ⓐ１に合格した後、Ⓑコースに変更していた。

そして、Ｉ期修了時のグレードは、最も多くグレードが進んだ学生（ｋ）と（ｐ）は、Ⓑ２からⒷ６Ａまで進んでいた。グレード取得状況を平均すると、Ｂコース選択者は全体で２～３段階進んでいることが分かった。また、弾き歌いの平均合格曲数は13.3曲であった。

次に、自信度についてであるが、入学時よりもＩ期修了時に自信度が上がったのは、28人中「ピアノ」は27名、「弾き歌い」は26名、「律動」は21名であった。初心者に近いレベルのＢコースでは、特に「ピアノ」と「弾き歌い」において、ほぼ全員の学生が自信をもてたと実感していたことが分かった。Ｂコースの「律動」の自信度が低い理由としては、Ｉ期中には律動の学修まで至らず、Ⅱ期に律動の修得を予定している学生が多いことが考えられる。Ｉ期開始時と修了時に行った意識

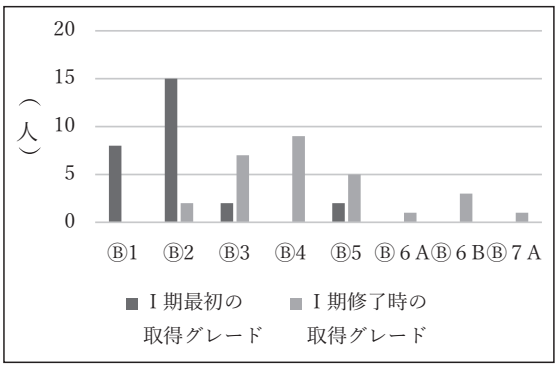

図５　Ｂコースのグレード取得状況

調査の平均値の差は、「ピアノ」は1.97点、「弾き歌い」は2.57点、「律動」は1.36点で、３分野ともＩ期修了時に自信度が高くなっている。特に「弾き歌い」の点数差が大きく、自信を持てた学生が多いようである。

ここからは、Ｉ期修了時の学生の感想記述を取り上げながら、自信度の結果に対する理由を探る。

（ｈ）は、入学時の自信度が３項目とも１点であったが、Ｉ期修了時には自信度が上がっている。感想には、「今まで苦手意識があり、練習するのも嫌だったが、授業を受け練習を重ねるうちに、楽しさと面白さとやりがいを感じ、全く弾けなかったのに、少し弾けるようになってとても嬉しかった」と記されていた。また（ｉ）の自信度は、「ピアノ」「弾き歌い」ともに４点上がり、「練習すればするほど弾けるようになったと感じた」と記述していた。両者ともまさに練習することによって楽しさが生まれ、結果として成長も実感できたという例である。他にも複数同様の感想が見られた。

その他、最も多くのグレードに合格した（ｋ）の感想には４月に「器楽Ｂ（Ⅱ期）に入るまでにソナチネに入る」と目標を立てたが、目標達成できなかったことが残念だと記され、合わせてⅡ期での具体的な目標も記されていた。より具体的な目標をもつことも重要であることが分かる。

（ｆ）のみ、「ピアノ」も「弾き歌い」も自信度が１点ずつ下がっているが、感想には小さい頃に習っていたが大学に入ってからは曲が難しくなったこ

表８　Ｂコースの学生のグレード取得状況とＩ期開始時と修了時の意識調査結果

学生	最初の取得グレード	Ｉ期終了時の取得グレード	弾き歌い合格曲数	律動３種類	Ｉ期開始時 自信度（10段階評価）意識調査			Ｉ期修了時 自信度（10段階評価）意識調査		
					ピアノ	弾き歌い	律動	ピアノ	弾き歌い	律動
(a)	Ⓑ３	Ⓑ５	10	—	5	4	4	6	4	4
(b)	Ⓐ１※	Ⓑ４	11	—	5	3	5	6	5	5
(c)	Ⓑ１	Ⓑ２	4	—	1	1	1	2	2	2
(d)	Ⓑ２	Ⓑ５	26	—	3	1	3	7	8	6
(e)	Ⓑ２	Ⓑ５	23	—	3	2	3	5	4	5
(f)	Ⓑ２	Ⓑ３	8	○	6	6	6	5	5	7
(g)	Ⓑ１	Ⓑ４	11	○	3	2	2	5	5	5
(h)	Ⓑ２	Ⓑ４	17	○	1	1	1	2	4	3
(i)	Ⓑ５	Ⓑ６Ｂ	20	—	2	2	2	6	6	5
(j)	Ⓑ２	Ⓑ３	4	○	3	3	3	6	4	7
(k)	Ⓑ２	Ⓑ６Ｂ	12	—	4	3	1	6	6	3
(l)	Ⓑ５	Ⓑ７Ａ	14	—	2	2	1	5	4	3
(m)	Ⓑ２	Ⓑ３	8	—	3	3	2	5	5	3
(n)	Ⓑ３	Ⓑ３	8	—	4	3	1	5	6	5
(o)	Ⓑ１	Ⓑ５	13	—	1	1	1	3	3	2
(p)	Ⓑ２	Ⓑ６Ｂ	20	—	3	2	3	4	5	4
(q)	Ⓑ２	Ⓑ６Ａ	17	—	4	3	5	6	7	5
(r)	Ⓑ１	Ⓑ３	8	—	1	1	1	3	4	2
(s)	Ⓑ２	Ⓑ４	23	○	5	5	3	6	6	5
(t)	Ⓑ２	Ⓑ３	13	—	1	1	1	5	5	4
(u)	Ⓑ１	Ⓑ３	16	—	2	1	1	6	6	3
(v)	Ⓑ２	Ⓑ４	15	—	3	1	3	4	2	1
(w)	Ⓑ１	Ⓑ４	8	○	1	1	1	3	3	3
(x)	Ⓑ２	Ⓑ４	20	—	1	1	1	3	3	1
(y)	Ⓑ１	Ⓑ４	15	—	2	1	1	5	5	2
(z)	Ⓑ２	Ⓑ２	6	—	2	1	1	4	3	1
(aa)	Ⓑ１	Ⓑ４	13	○	5	4	3	6	6	4
(bb)	Ⓑ２	Ⓑ５	8	—	3	2	5	5	7	3
平均値	2.00	4.36	13.25	—	2.82	2.18	2.32	4.79	4.75	3.68

とや今までの指の形を見直し、指を立てて弾くことがまだ慣れないので頑張りたいと書いてあった。

新たな課題が見つかり、その克服がまだ十分に至っていないと感じているようにうかがえた。

表９　各コースのグレード取得状況とⅠ期開始時と修了時の意識調査の平均値

学生	最初の取得グレード	Ⅰ期終了時の取得グレード	弾き歌い合格曲数	律動３種類	Ⅰ期開始時 自信度（10段階評価）意識調査			Ⅰ期修了時 自信度（10段階評価）意識調査		
					ピアノ	弾き歌い	律動	ピアノ	弾き歌い	律動
Ｓコース	1.43	4.43（＋3.00）	20.0	―	7.57	6.57	7.57	7.29（－0.28）	7.00（＋0.43）	7.57（＋0.00）
Ａコース	1.00	3.88（＋2.88）	17.63	―	5.44	4.13	4.31	6.06（＋0.62）	5.63（＋1.50）	5.19（＋0.88）
Ｂコース	2.00	4.36（＋2.36）	13.25	―	2.82	2.18	2.32	4.79（＋1.97）	4.75（＋2.57）	3.68（＋1.36）

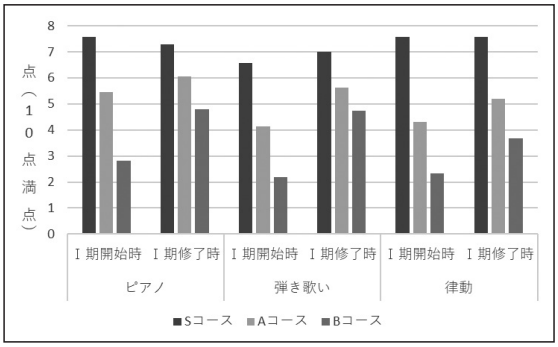

図６　コース間での自信度の比較

④コース間（レベル別）の比較

表９は各コースの平均値を比較したものである。また、図６は、コース間での自信度の比較をグラフ化したものである。まず、取得グレード数及び弾き歌い合格曲数は、Ｓコース＞Ａコース＞Ｂコースとなっている。ピアノ学習歴があるほど、グレードや弾き歌いの合格曲数が増えるのは当然の結果といえるであろう。また、10段階評価での自信度も、Ｓコース＞Ａコース＞Ｂコースとなっているが、Ⅰ期開始時と修了時の自信度を比較すると、「ピアノ」「弾き歌い」「律動」ともにＢコースの学生が、最も自信度が変化し、自信度が高くなっていることが分かる。３項目ともに、開始時と修了時の差を比較すると、Ｂコース＞Ａコース＞Ｓコースとなっている。初心者に近い学生ほど、両手で弾けるようになったり、弾き歌いができるようになったりしたことへの喜び、練習することによって上達していく充実感が大きいのであろう。そして、Ｓコースの「ピアノ」の自信度のみ、Ⅰ期開始時より修了時の方が低い。理由は、前述したように幼少期には気づかなかった新たな課題が発見されたことによるものであるが、ピアノ経験者がさらに演奏することへの楽しみや喜び、成長を実感できるような工夫が必要であるともいえる。

⑷　グレード取得状況と意識調査結果から得られた今後の課題

本稿では、３つのコース別に2021（令和３）年度Ⅰ期「器楽Ａ」のグレード取得状況と意識調査（自信度）の結果を中心に考察してきた。まず、３コースともに、半期間で平均２～３段階グレードが上がっていることが確認でき、グレード制の一定の成果が明らかとなった。意欲的な学生は、グレード表に基づきながら目標を立て、６、７段階進め、最も多く進んだ学生は11段階上げることができていた。

一方、自信度に関しては、当然ながら、Ｂコース（ピアノ初心者）の学生の自信度は、他コースと比較すると低く、特にⅠ期開始時の数値からも不安を抱えていることが読み取れたが、自信度の伸び率は、Ｂコースの学生が最も大きいことが確認できた。多くの学生の感想にも、苦労はしたが、弾けるようになったときの喜びや楽しさを実感できたことが記され、またより一層練習に励みたい等といった意欲や自己への課題も記述されていた。このことから、ＢコースにおけるⅠ期の課題は、学生の意欲を掻き立てる内容になっていることが分かった。しかし、ＡコースやＳコースの自

信度の伸び率はＢコースよりも低く、さらにはＳコースの「ピアノ」はＩ期開始時より自信度が低くなっていることが明らかになった。ピアノ経験者の意欲がより一層高まるような工夫が必要である。桐岡[iii]らも上級レベルの学生が意欲的に取り組めるようなグレード制への改訂を課題として挙げていたが、同じ状況が本学でも生じていることが確認された。

今後、例えば、コロナ禍以前に行っていた、ＳコースやＡコースのグレード表にある「当日指定」による試験内容や、Ｓコースの初見視唱、初見演奏、そして伴奏付けなども従来同様の試験形式で実施できる方法を検討する必要がありそうである。また、レベルに関係なく、各自がより具体的な目標をもって練習に取り組めるような工夫も必要不可欠である。例えば、今回の感想記述に見られた、学生自身が成長を実感できた点や新たな課題として自覚できた点などを参考に、保育者として必要な技能及び表現力の獲得を目指せる具体的な目標設定方法を検討していきたい。

４．おわりに

本稿では、入学時から半期間のピアノグレード取得状況と意識調査を分析してきた。今後は、１年間あるいは在学期間中でのピアノレベルや意識の変化を整理していきたい。

2019（平成31）年に新教職課程が導入され、本学でも2022（令和４）年度中に、教職課程の変更が行われることになっている。これまでの教職課程の必修科目であった「器楽Ａ」や「器楽Ｂ」も含め、芸術関係科目全体のカリキュラムを編成し直す必要がある。保育者が生き生きと音楽活動を行うためには、ピアノや弾き歌いの技術の修得はもちろんであるが、それらを活かし、子どもたちの表現を引き出していく保育者自身の感性や表現力も欠かせない。「領域及び保育内容の指導法に関する科目」とピアノ等の表現技術を修得するための科目との連携を図りながら、学生たちが自信をもって子どもたちと共に楽しみながら、子どもたちの表現を引き出せる力を育てていきたいものである。

〈引用・参考文献〉

i　田中敬子「2014年度～2017年度の保育科の音楽教育改革について」『兵庫大学短期大学部研究集録』No.52・53合併号、pp.41-50、2018

ii　Ｓ・Ａコースの弾き歌い用の使用テキスト
小林美実『音楽リズム　幼児のうた楽譜集』東京書籍、1986
Ａ・Ｂコースの弾き歌い用の使用テキスト
『やさしく弾けるピアノ伴奏　保育のうた12か月』新星出版社、2011
※Ａコースは任意

iii　桐岡亜由美　松園洋二「保育養成課程におけるピアノ指導の一考察　―グレード制導入の試み―」『保育研究』第43号、pp.1-8、2015